病院風景

寺田寅彦

東京××大学医学部附属病院、整形外科病室第N号室。薄暗い廊下のドアを開けて、室へはいると世の中が明るい。南向きの高い四つの窓から、東京の空の光がいっぱいに流れ込む。やや煤（すす）けた白い壁。婦人雑誌の巻頭挿画らしい色刷の絵が一枚貼ってある。ベッドが八つ。それがいろいろ様式がちがう。窓の下に一列のスチームヒーター。色々の手拭やタオルの洗濯したのがその上に干し並べてある。それらがみんな吸えるだけの熱量を吸って温かそうにふくれ上がっている。

コキコキ。コキコキ。コキコキコキッ。

ブリキを火箸でたたくような音が、こういうリズム

で、アレグレットのテンポで、単調に繰返される。兎唇（みつくち）の手術のために入院している幼児の枕元の薬瓶台の上で、おもちゃのピエローがブリキの太鼓を叩いている。

ブルルル。ブルルル。ブルブルブルッ。

窓の下から三間（げん）とはなれぬ往来で、森田屋の病院御用自動車が爆鳴する。小豆色（あずきいろ）のセーターを着た助手が、水道のホーズから村山貯水池の水を惜気（おしげ）もなく注いで、寝台自動車に冷たい行水を使わせている。流れた水が、灰色のアスファルトの道路に黒くくっきりと雲の絵をかいている。

またある日。

窓の下の森田屋の前で、運転手と助手とが羽根をついている。十くらいの女の子も二人でついている。子供の方が大人より上手である。若い丸髷(まるまげ)の下町式マダムが弁慶縞の上っぱりで、和装令嬢式近代娘を相手に、あでやかにつややかに活躍している。

またある日。

糸のような雨が白い空から降る。右手の車庫のトタン屋根に雀が二羽、一羽がちょんちょんと横飛びをして他の一羽に近よる。ミーラヤ、ラドナーヤとでも囀(さえず)っているのか。相手は逃げて向うの電柱の頂へ止

まる。追いかけてその下の電線へ止まる。頂上のはじっとして動かない。下のは絶えず右に左にからだを振り動かしている。いつまでも動かしている。

その電柱の辺に、学生時代のクラスメートＴＭの家がある。彼は今はＷ大学の数学の先生である。三十年前にはよくＴＭと一緒に本郷、神田、下谷（したや）と連立（つれだ）って歩いた。壱岐殿坂（いきどのざか）教会で海老名弾正（えびなだんじょう）の説教を聞いた。池（いけ）の端（はた）のミルクホールで物質とエネルギーと神とを論じた。

ＴＭの家の前が加賀様の盲長屋（めくらながや）である。震災に焼けなかったお蔭で、ぼろぼろにはなったが、昔の姿の名

残を止めている。ここの屋根の下に賄（まかな）いの小川の食堂があって、谷中（やなか）のお寺に下宿していた学生時代に、時々昼食を食いに行った。オムレツと焼玉子の合の子のようなものが、メニューの中にあった。「味つき」と「味なし」と二通りあった。「オイ、味なし」。「味つき」。そういうどら声があちらこちらに聞こえた。今は雑使婦か何かの宿舎になっているらしい。そのボロボロの長屋に柿色や萌黄の蛇（じゃ）の目（め）の傘が出入りしている。

　またある日。

　蒲団を積んだ手荷車が盲長屋の裏を向うへ、ゆるやかな坂を向うへ上って行く。貸夜具屋が病院からの電

話で持込むところと想定してみる。突当りを右へ廻れば病院の門である。しかし車は突当りまで行って止った。そこの曲り角の処で荷物をほごしている。曲り角には家はないはずである。分からない。どう考えてもこの蒲団の行方は分からない。余所の蒲団の行先は分からない。

　この角の向側に牛肉屋の豊国（とよくに）がある。学生の頃の最大のラキジュリーは豊国の牛鍋（ぎゅうなべ）であった。色々の集会もここであった。天文関係の人が寄ったときにその頃発見された新星ノヴァ・ペルセイの話が出た。新星と豊国がその時から結合した。磁力測量に使う磁石棒

の長さをミクロンまで精密に測ろうとして骨折った頃にもよく豊国の牛肉を食った。磁石と豊国とがその時から結合した。

解剖学のO教授もよくここの昼食を食いに来ていた。ドイツ生れのO夫人がちゃんと時刻をたがえずやって来て一つの鍋のロースを日本の箸ではさんでいた。三十余年前にはこれが珍しかった。

ある夜。

岩崎の森の梢に松坂屋の照明が見える。寒い暗い都会霧の中に夢のワルハラのごとく光の宮を浮上がらせる。

上野の動物園の森で一度に鳴き出す色々の鳥類のけたたましい声が聞こえる。

廊下から中央階段を降りようとする途中で窓越しに東を見ると、地下鉄ビルの照明が見える。サッポロビールの活動照明、ビール罎の中から光の噴泉が花火のように迸（ほとば）しる。

靴が見えない。玄関の隅々をのぞき廻る。「××さん、靴はあちらですよ」。白い制服を脱いだ看護婦達はやはり女性である。

またある日。

廊下の突当りの流し。タップをひねれば、いつでも

湯が出る。一つコックの工合の悪いのがあって、それから湯が不断に流出している。もったいない、と知らぬおばさんが云う。暖かい湯気が立上がる。しおれた白百合やカーネーションが流しの隅に捨ててある。百合の匂。カーネーションの匂。洗濯する人。お化粧する人。

　小使が流しの上へ上がって、長い棒を押し立てて、何かゴボゴボ音を立てている。棒の先にゴムの椀のようなものが取付けてある。この椀を流し口の穴の上に俯向(うつむ)きに当てて、押したり放したり押したりまた放したりする。流し口の穴のつまったのをこうして疎通さ

せる工夫と見える。流しの鉛管をつまらせる事は日本人の特長であるらしい。

看護婦が手押車に手術器械薬品をのせたのを押して行く。西日が窓越しに看護婦の白衣と車の上のニッケルに直射する。見る目が痛い。手術される人はそれがなお痛いことであろう。

病院で手術した患者の血や、解剖学教室で屍体(したい)解剖をした学生の手洗水が、下水を通して不忍池(しのばずのいけ)に流れ込み、そこの蓮根(れんこん)を肥やすのだと云うゴシップは、あれは嘘らしい。

廊下の東詰の流しの上の明かり窓から病院の動物小

屋が見える。白兎やモルモットらしいものが檻（おり）の中に動くのが見える。これらの動物は、神経を切られたり、動脈へゴム管を挿されたり、病菌を植付けられたり、耳にコールタールを塗って癌腫（がんしゅ）の見本を作られたりする。

谷を距（へだ）てた上野の動物園の仲間に比べるとここのは死刑囚であろう。

動物をいびり殺した学士が博士になる。

殺される動物は、ほがらかな顔をしている。

またある日。

屋上へのぼる。階上に洗濯室が二つ。鼠色の制服を

着た雑使婦の婆さんが洗濯している。どこかミレーの絵の鼠色の気分である。屋上の砂利の上に関東八州の青空。風が強くて干し物がいくつか砂利の上に落ちている。清らかになまめかしい白足袋も一足落ちている。北側の胸壁にもたれて見下ろす。巡査が一人道側へ立って警戒している。何の警戒か分からぬ。しかし何かを警戒していることは分かる。

Ｈ首相が入院していた時の物々しい警戒を思い出す。悪いことをしないものは恐ろしくて通れなかった。

昔の医科大学の時計台もとくに無くなった。去年札幌へ行って、明治時代の時計台建築の遺物を見て涙が

出そうな気がした。年を取ると涙腺の居ずまいが変ると見える。

「鉄門」も塞がれた。鉄門という言葉は明治時代の隅田川のボートレースと土手の桜を思い出させる。鉄門が無くなって、隅田堤がコンクリートで堅まれば、ボートレースの概念もやはり変って来る。明治の隅田川はもうなくなった。ただの荒川下流になった。

またある日。

本郷区役所がコンクリートの豆腐に変った。隣りのからたち寺の樹立（こだち）、これだけは昔のままらしい。電柱の雀がからたち寺へ飛んで行く。人間の世界は

何もかも変って行くが、雀はおそらく千年前の雀と同じであろう。

またある日。

赤門からはいって行く。欅(けやき)の並木をつつむ真昼の寒い霧。向うから幸福な二人連れが来てすれちがう。また向うからただ一人、洋紅色のコートを着た若い令嬢が俯向いたまま白いショールで口を蔽(おお)うて、ゆっくりゆっくり歩いて来る。血色のいい頬、その頬が涙で洗われている。

正月の休みで、外には誰も通る人がない。旧解剖学教室、生理学教室の廃墟には冬枯れの雑草ががらがら

に干からびて哀れである。いかめしい城郭のようなライブラリーも柔らかで憂鬱な霧の薄絹に包まれている。涙の女はゆっくりゆっくり図書館の方へ歩いて行く。しばらくして、もう一遍振返って見ると、女は引返してまたこっちへゆっくりゆっくり歩いて来るらしい。可哀相に。

からだの怪我や片輪は、直るものなら病院で直してくれる。傷ついた心、不具な理性を直してくれる病院はないものか。昔はそれがあった。それが近代の思想の嵐に倒潰した。そうしてこれに代わるべき新しい病院はまだ建たぬ。可愛相に。

病院も正月で静かである。病室は明るく温かい。窓の下では羽根をついている。今日も雀は居る。昨日の雀だかどうかは分からない。雀はどれを見ても人間には同じである。

（昭和八年四月『文学青年』）

底本：「寺田寅彦全集　第一巻」岩波書店
１９９６（平成８）年12月5日発行
入力：Nana ohbe
校正：松永正敏
２００４年３月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。